



五百旗頭真の大災害の時代

第27回 [津波常習地の三陸海岸]

認識動かし直近の体験

「三陸沿岸は津波襲来の常習地として日本一はわろが世界一なのである。そう断じたのは、1923年の関東大震災の到来を強く警告し、20年には地震学会初代会長となり、学術的な地震研究の推進とともに、社会的な防災向上のために奔走した今村明恒博士であった。この地への津波襲来についての研究は「ほぼ40年に1度(社会経済史学者の森鷗外氏)とか、35年周期(京都大学防災研究所の中村重久氏)とかよそでは考えられない頻度を告げている(山下文男「歴史 三陸津波」)。

869年の貞観地震以降の三陸津波が、今日研究者の関心となった感があるが、ここでは幕末以降、近代の災害を見ておきたい。幕末の安政年間に大災害が連発し、幕府の統治能力を痛めつけたことはいくつも知られている。ペリー来航の翌1854年12月23日、遠州灘沖を震源とするマグニチュード(M)8.4の安政東海地震津波が勃発し、ロシアの使節フチャーチンの軍艦が下田で大破したのを始め、大きな被害を出した。その翌日、土佐沖を震源とする同じくM8.4の南海地震が連発し、数千人の犠牲者を出した。1日連発で南海トラフ沿いの地震が連動したわけであるが、もし1日の差がなく同時に起こっていたら、桁外れの大災害となっていたであろう。

その翌年の11月11日、荒川河口を震源とするM6.9の江戸直下地震があり、数千人の犠牲者を出した。

安政年間に地震集中——安政シナリオが憂慮される今日の日本列島である。以上は安政3大震災として知られるが、実はそれ以外にも日本列島各地に20件ほど被害の出る地震が安政の数百年間に集中して起こった。その一つが、ほとんど知られていない1856(安政3)年の青森県・八戸沖を震源とするM7.5の地震であった。それは三陸地方に津波をもたらし、人が被害を直撃した。しかし、人も社会も直撃の体験に認識を支配される。たとえば、もし1611年の三陸に大被害をもたらしたM8.1の慶長津波の後であれば、人々は顔色を変えて地震後の対応を行ったであろう。それ以後、頻りに津波の来訪を受けた三陸沿岸であるが、徳川の250年間、安政の津波に至るまで三陸沿岸の被害は人々の生活を破壊させるようなものではなかった。それに入々が憤れ、緩んできた。1896年の明治三陸津波の被害をいっそう巨大なものとしたように思われる。

それは日清戦争の翌年であるが、6月15日は旧暦の5月5日端午の節句(こどもの日)に当たっていた。朝からの雨を吹かされた。その翌年の5月5日、6月15日は旧暦の5月5日端午の節句(こどもの日)に当たっていた。朝からの雨を吹かされた。その翌年の5月5日、6月15日は旧暦の5月5日端午の節句(こどもの日)に当たっていた。朝からの雨を吹かされた。

明治三陸津波の最大波高(通常の海水面比)の高さは、大船渡湾の東側に突き出した半島の入り江である綾里湾の白浜で38.2mの最高を記録した。綾里村では人口の56%にあたる1,069人が津波にのみならず、津波の南に位置する唐丹村には16.7%の津波が押し寄せ、住民の66.4%にあたる1,088人が犠牲となった。当時、最大人口の約7,000人を三陸沿岸で誇っていた釜石町も、54%に相当する3,765人が命を失った。全住民が海辺に住んでいるわけではなく、内

陸部にも集落があることを思えば、全人口の半分以上、3分の2の犠牲という数値は信じ難いものであり、海辺のまちは全滅に近い事態であったと思われる。他方、宮古町死者70人、全住民の1.2%、大船渡村10人、7.7%はなぜか相対的に少ない犠牲にとどまった。

壊滅的被害の田老村

そんな中で、全村壊滅というべき非業の瞬間を迎えたのが田老村であった。14.6%の津波に村はのみならず、345戸の全家が全壊し、人口の83.1%にあたる8,077人が犠牲となった。村は消えてなくなり、ただの砂浜になった。悪魔が意図的に殺そうとしたければ、不可能な数値である。青森県から宮城県にかけて三陸海岸で、岩手県を中心に約1,000人の犠牲を強いられた明治三陸津波であった。全佐藤龍夫「資料 日本被害地震誌」宮城県と岩手県の調査、前掲山下文、田老村については高山文彦「大津波を生きた——巨防防備と田老百年のいとなみ」。

1933年の昭和三陸津波は、それから37年後に起こった。37年といえは明治津波を10歳で体験した者がまだ47歳の地域の中心的存在である。すまじい津波の記憶はまだ鮮烈であった。しかも数年前から体感しているほどの地震が頻発し、人々は大自然の変調に敏感となっていた。3月3日の桃の節句(ひな祭り)の日を迎える深夜の午前2時31分、三陸地方は震度5と見られる激しい揺れに見舞われた。前掲書の著者、山下氏は綾里村の小学4年生だったが、神棚から物が落ちて、メリメリと音がぶれそうでも、家族10人がみな声を出して跳び起き、自身は父にしがみついたという。

明治津波が警告もなげく急襲したのに対し、昭和津波は、幾重にも騒がしいほどの警報を発した上でやってきた。それによって、津波の勢力は前回ほどはなかった。綾里村で最大波高28.7mを記録し、全人口の67.7%にあたる1,788人が犠牲となった。8.3%の津波に襲われた唐丹村は10.7%に当たる3,600人が命を失った。この度もまた、最大の被災は田老村であった。午前3時ごろに襲来した10.1%の津波にのみならず、全住民の32.5%にのぼる9,011人が命を奪われたのである。たまたま外海へ漁に出ている漁船の警報を990隻が失われた。再度の大津波に壊滅的打撃を受けた田老は、優れた指導者である関口松太郎村長の下で、力強い復興計画を構想し実施する。当時の公的方針であった高所移転を返って防波堤の構築、街路の全面的再編、避難路の拡充を軸に「原所復興」を断行した。田老の歴史については改めて触れない。

昭和三陸津波の3県にまたがる犠牲者は29,959人にのぼったが、それは明治津波の7分の1以下にとどまる。確かに波高も波勢も明治の方がすさまじかった。けれども昭和津波の場合も10%以上の波高を記録した入り江が少なくなかった。もし人々が逃げなければ、明治に準ずる命が失われたことであろう。

前回の悲惨な教訓の存在と、地震そのものの揺れが大きかったことから、水点下10度の深夜にもかわらざる高台に向かって逃げる人が多かったのがその理由である。物理的条件に劣らず、人々の認識に基づくソフトが決定的要因であったと思われる。

昭和三陸津波の後、今村博士の強烈な助言に動かされた内務省が、国策と政策をもって高所移転を支えたことは注目される。この地は津波に対する安全性が改善されただけでなく、世界銀行の報告書が指摘するよう、過去の教訓が学校教育などに根づいていた。2011年3月11日の大津波は、明治津波よりもはるかに広範囲であったにもかかわらず、犠牲者はほぼ同レベルにとどまった。社会の側のハード、ソフトにまたがる改善の結果である。他方、因果の歯車のやむごとなし回転も異落すことができない。1980年のチリ津波が日本全国1122人余の犠牲者を出した。昭和津波から78年を経て2011年には、多くの三陸の住民にとってさほど恐ろしくもなかったチリ津波が唯一の体験となっていた。逃げなかった人々のうち、チリ津波を思い起した人、3%の津波という気象庁の警報を聞いて大丈夫と思った人が少なくないのである。

津波災害の緩やかな時代を一定期間過すと、人々の対応は甘くなり、激烈な津波を体験すると激しく対応するに至る。こうした社会的気分の振動は避け難いが、東日本大震災は、一部の人々が気を緩めた中でも、社会的にはハード、ソフトとそれなりに対応力を高める中で襲来した。この超歴史的な大災害の結果、日本社会が決定的かつ永久に激しい対応力を確保することを願いたい。

いおきべ・まこと ひょうい
震災記念21世紀研究機構理事
長、熊本県立大学理事長・日本
政治外交史

明治と昭和の三陸津波における被災状況

	明治三陸津波 (1896)				昭和三陸津波 (1933)			
	死者	人口	死亡率	家屋倒壊比率	死者	人口	死亡率	家屋倒壊比率
田老村	1867	2248	83.1	100	901	2773	32.5	89.4
唐丹村	1684	2535	66.4	81.6	360	3380	10.7	43.7
綾里村	1269	2251	56.4	80.7	178	2640	6.7	59.5
釜石町	3765	6986	53.9	75.7	38	7420	0.5	9.5

※明治三陸津波において、被災率の高かった4町村を示す。山下文男「歴史 三陸津波」より作成



明治三陸津波に襲われた岩手県釜石町＝1896年6月撮影

1933年の昭和三陸津波は、それから37年後に起こった。37年といえは明治津波を10歳で体験した者がまだ47歳の地域の中心的存在である。すまじい津波の記憶はまだ鮮烈であった。しかも数年前から体感しているほどの地震が頻発し、人々は大自然の変調に敏感となっていた。3月3日の桃の節句(ひな祭り)の日を迎える深夜の午前2時31分、三陸地方は震度5と見られる激しい揺れに見舞われた。前掲書の著者、山下氏は綾里村の小学4年生だったが、神棚から物が落ちて、メリメリと音がぶれそうでも、家族10人がみな声を出して跳び起き、自身は父にしがみついたという。

明治津波が警告もなげく急襲したのに対し、昭和津波は、幾重にも騒がしいほどの警報を発した上でやってきた。それによって、津波の勢力は前回ほどはなかった。綾里村で最大波高28.7mを記録し、全人口の67.7%にあたる1,788人が犠牲となった。8.3%の津波に襲われた唐丹村は10.7%に当たる3,600人が命を失った。この度もまた、最大の被災は田老村であった。午前3時ごろに襲来した10.1%の津波にのみならず、全住民の32.5%にのぼる9,011人が命を奪われたのである。たまたま外海へ漁に出ている漁船の警報を990隻が失われた。再度の大津波に壊滅的打撃を受けた田老は、優れた指導者である関口松太郎村長の下で、力強い復興計画を構想し実施する。当時の公的方針であった高所移転を返って防波堤の構築、街路の全面的再編、避難路の拡充を軸に「原所復興」を断行した。田老の歴史については改めて触れない。

昭和三陸津波の3県にまたがる犠牲者は29,959人にのぼったが、それは明治津波の7分の1以下にとどまる。確かに波高も波勢も明治の方がすさまじかった。けれども昭和津波の場合も10%以上の波高を記録した入り江が少なくなかった。もし人々が逃げなければ、明治に準ずる命が失われたことであろう。

前回の悲惨な教訓の存在と、地震そのものの揺れが大きかったことから、水点下10度の深夜にもかわらざる高台に向かって逃げる人が多かったのがその理由である。物理的条件に劣らず、人々の認識に基づくソフトが決定的要因であったと思われる。

昭和三陸津波の後、今村博士の強烈な助言に動かされた内務省が、国策と政策をもって高所移転を支えたことは注目される。この地は津波に対する安全性が改善されただけでなく、世界銀行の報告書が指摘するよう、過去の教訓が学校教育などに根づいていた。2011年3月11日の大津波は、明治津波よりもはるかに広範囲であったにもかかわらず、犠牲者はほぼ同レベルにとどまった。社会の側のハード、ソフトにまたがる改善の結果である。他方、因果の歯車のやむごとなし回転も異落すことができない。1980年のチリ津波が日本全国1122人余の犠牲者を出した。昭和津波から78年を経て2011年には、多くの三陸の住民にとってさほど恐ろしくもなかったチリ津波が唯一の体験となっていた。逃げなかった人々のうち、チリ津波を思い起した人、3%の津波という気象庁の警報を聞いて大丈夫と思った人が少なくないのである。

津波災害の緩やかな時代を一定期間過すと、人々の対応は甘くなり、激烈な津波を体験すると激しく対応するに至る。こうした社会的気分の振動は避け難いが、東日本大震災は、一部の人々が気を緩めた中でも、社会的にはハード、ソフトとそれなりに対応力を高める中で襲来した。この超歴史的な大災害の結果、日本社会が決定的かつ永久に激しい対応力を確保することを願いたい。

いおきべ・まこと ひょうい
震災記念21世紀研究機構理事
長、熊本県立大学理事長・日本
政治外交史